

絵本における褒め表現の日英語対照研究

異文化コミュニケーションゼミナール 1415030 鈴木 理子

1. 研究動機・研究目的

筆者は大学1年次に語学研修に参加し、現地の方々と交流を行い貴重な経験をする事ができた。この経験を機に異文化に興味を持つようになり、日本人と外国人のコミュニケーションに明確な類似点と相違点があるのか疑問に思った。筆者はアルバイトで従業員の教育を担当しており、研修を受けていた頃に上司から「褒めることを忘れずに」とアドバイスをいただいたこともあった。そこで、褒める表現について言語と文化を背景に類似点と相違点があるのか気になり、研究のテーマに設定した。その中で親以外の大人や同年代の子どもと人間関係を築き始める時期である幼児期・児童期に読まれる絵本においてどのような褒め表現が用いられているかを分析し、日英語における効果的な褒め表現について検討した。

2. 研究方法

本研究では、日本と英国の絵本各10冊で使用される褒め表現を分析対象とした。絵本については、2000年以降に発行され、大人と小学生までの子どもの会話が含まれているものを研究対象とした。会話については、日常生活の場面で用いられたものを対象とした。日本の絵本は作者が日本人であること、英国の絵本は作者が英国人であることとした。ほめの定義は、「物事を評価し、よしとしてその気持ちを表す」(広辞苑第六版)とした。分析方法について、①褒め表現の使用頻度(絵本1冊に含まれる会話のうち褒め表現が使用されているものの割合と発話者の性別・大人と子どもの割合)、②話者と聞き手の関係(褒めの発話を行った者と聞き手の性別・年齢)、③褒めの対象(行動・能力、もの・こと、容姿、相手の人格・性質、周りの様子のどれを褒めたのか話者の性別と年齢ごとに分析)、④褒め表現の文構造(名詞、形容詞、動詞、感嘆文のどの構造を用いているか話者の性別と年齢ごとに分析)の4点を分析し、共通点と相違点を精査した。

3. 主な結果と考察

日本語と英語の絵本各10冊における褒め表現の使用頻度(平均)について、日本語の絵本は褒め表現を含んだ発話が全体の発話の9%であり、10ページに1回の割合で描写されていた。英語の絵本は全体の発話のうち褒め表現を含んだものが8%であり、9ページに1回の割合で描写されていた。褒め表現を含む会話が描写されていない絵本もあった。発話者について男女別に示すと、日本語の絵本では男性が58%、女性が42%であり、英国の絵本では男性が55%、女性が28%、両者同時が17%であった。年齢別で示すと、日本語の絵本では大人が65%、子どもが35%であるのに対し、英国の絵本では大人が45%、子どもが52%、両者同時が3%であった。話者と聞き手の関係について、日本語の絵本では同性どうしの組み合わせが全体の68%、異性どうしが32%であった。英語の絵本では同性どうしが全体の35%、異性どうしが31%、話者もしくは聞き手が男女両者の場合が34%であった。年齢で分類すると、日本語の絵本では大人と子どもの組み合わせが81%、大人どうしもしくは子どもどうしの割合が16%であるのに対し、英語の絵本では大人と子どもの組み合わせが42%、大人どうしもしくは子どもどうしの組み合わせが42%であった。ほめの対

象について、日本語の絵本では行動・能力について褒めることが52%で最も多かったのに対し、英語の絵本ではもの・ことを褒める場合が65%で最も多かった。日本語の絵本には5種類の褒めの対象があったが、英語の絵本では容姿、相手の人格・性質を褒める表現が描写されていなかった。話者の性別ごとに分析した際、日本語の絵本は女性に比べ男性の方が対象の種類が多かったのに対し、英語の絵本は種類の数は同じであった。大人と子どもで分類した際、日本語の絵本では大人に比べ子どもの方が褒めの対象の種類数が多いのに対し、英国の絵本では逆であった。褒め表現の品詞について、日本語、英語の絵本ともに形容詞を用いている割合が最も多かった。また、英語の絵本では、感嘆文を用いた褒め表現が用いられていた。性別ごとに分析すると、日本語の絵本では男性の方が種類数が多く、英語の絵本では同じであった。大人・子ども別で分析すると日本語の絵本では種類数が等しく、英語の絵本では大人の方が多かった。

4. 結論

日本語の絵本と英語の絵本において、褒め表現を含まない絵本があること、褒め表現を含んだ発話数がほぼ同じであったこと、男性からの褒めの発話が多かったこと、形容詞を最も多く用いていたことが共通していた。一方、話者と聞き手の性別と年齢の組み合わせの割合、最も多い褒めの対象、褒めの対象の種類、文構造の種類に差違が見られた。褒め表現を含む発話について、男性の割合が多いことから、自分の意図をはっきり伝える傾向は男性に多く、背景として男性優位な社会であることが関連していると考えられる。話者と聞き手の関係について、日本語の絵本では大人の発話者が多く、英語の絵本では子どもの発話者が多かった。日本では上下関係がはっきりしており、英国では褒め言葉を通じて関係を深めていく点が結果に違いをもたらしたと考えられる。褒めの対象について、日本語では相手の行動・能力を褒めており、相手を認める役割があると考えられる。一方、英国ではもの・ことを対象とすることが最も多く、挨拶や会話に伴って用いて親密性を深める役割があると考えられる。日本では言わなくていいことはあえて言わない、英国では直接的な表現を好む特徴があり、コンテキストの違いと結び付けることができる。品詞について、形容詞が最も多かった。形容詞はもの・ことの様子を表現する役割があること、そして一語で意味を成すため幼い子どもでも簡単に用いることができる点が結果の背景要因として考えられる。また、置かれている環境も表現の仕方に差違が出た要因として考えられる。違いに気づき、意識することで効果的な異文化コミュニケーションを行うことができるが、自身の文化を基準に解釈をしてしまうと誤解を生み出す原因になる。言語や人種など目に見える違いだけでなく、解釈の仕方など目に見えない違いをあることを忘れてはならない。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本研究に取り組むにあたって、須藤先生をはじめ多くの先生方に大変お世話になりました。そしていつも身近で心強いサポートをしてくれた家族、ゼミのメンバー、友人、大学関係の皆さまにも感謝の気持ちを伝えたいと思います。本当にありがとうございました。大学生活で経験したこと、学んだことをこれから先に活かすことはもちろん、ゼミのモットーである“Study hard, play hard”, “Doing nothing is doing ill”を忘れずに何事にも取り組んでいきたい。